

事例レポート ①

総合リサイクル業への変身と地域貢献活動

株式会社マテック
顧問 小笠原 紘一氏



廃品回収業から総合リサイクル業へ変身、高い技術力で再生可能なあらゆる資源の創造にチャレンジ。リサイクル産業の社会的地位を高めるためにもCI事業の展開や社会貢献分野でも業界を牽引する努力が続けられています。

地域社会や教育分野との連携

昨年、創業70年の記念事業でリサイクルポイントカードシステムを本格稼働し、リサイクルビデオを制作配布しました。

リサイクルポイントカードシステムは、空き缶など持込んだ資源物に応じて、購入料金とは別にカードにポイントを貯めてもらい、好きな商品に交換できる画期的なシステムです。グリーン購入対象商品や福祉・慈善活動に対応できる商品までそろえています。子供たちにモノを大切にすることを養ってほしいと思っ



昨年から始まった
リサイクルポイントカードシステム

リサイクルビデオは、現代社会の仕組みやリサイクルの大切さを、分かりやすく楽しく学べる学習ビデオです。全道の学校に配布しました。先生方にも非常に好評で、もっと送ってほしいと道庁や学校からの引き合いが多くありました。

工場設備の一般開放は業界の中でも率先してやってきました。安全に楽しく見学してもらえるよう、見学者と作業員がお互い邪魔にならないよう見学通路などを設け、児童向けの資料なども用意しています。

スペースも必要だし、お金もかかりますが、企業が地域社会に根ざして共存していくためには重要なことだと思っています。これまでも学校や地域の方など多くの方が見学に訪れています。

地域のイベントなどにも積極的に協力しています。2002年に帯広競馬場で世界の現代アートを集めて好評だった「とかち国際現代アート展“デメーテル”」にも積極的に協賛しました。また、東京での環境展やアクセス札幌でのリサイクル展（I Love Recycle）にもずっと参加しています。

リサイクル産業が社会的理解を得て行くために

リサイクル産業は、限られた資源の地球で文明社会を維持していくためには重要な産業です。しかし、残念ながら、産業や企業としての社会認識や理解度が非常に低く、いまだに理解されていない面があります。

そこで、私どもはリサイクル事業に対する社会的認識を改善していくために、さまざまな努力をしてきました。1992年にはCI（コーポレート・アイデンティティ）事業を展開して、社名を丸八杉山商店からマテックに変更し、総合リサイクル業としての姿勢を打ち出しました。マテック（MATEC）はMATERIAL（資源）とCREATION（創造）の造語ですが、資源を破壊せずに、先進の技術で再生可能な資源の創造を行っていくという意味を込めています。

昨年はテレビコマーシャルも放映しました。リサイクル業でコマーシャルを放映したのは当社が道内で初めてです。こうしたことで、400人の社員の意識も変わってきましたし、取引の引き合いなども増えています。また、これまで求人にも苦労してきましたが、学生の求職希望が増えてきました。

企業理念の一つに、天然資源や加工物に次ぐ第3の資源創造開発企業とうたっていますが、常にこうした哲学の上に立って、カッコいいと思われる企業姿勢を示していきたいと思っています。

昨年、当社の代表取締役の杉山博康が鉄リサイクル工業会の北海道支部長に就任しました。工業会としても、リサイクル業への見方を変えてもらえるような努力をしていきたいと思っています。

最先端の技術で循環型産業をリードしていく

循環型産業の使命

現在の産業経済システムは、後始末（廃棄物処理）にお金がかかるようになってきました。リサイクル産業は、外部不経済を内部化して社会的な費用や負担を小さくしていく使命を負っています。

しかし、リサイクル産業の大変なところは、リサイクルにかかる費用を商品としての価格に転嫁できないことにあります。これまでは、補助金がないと設備投資もできないような業種でした。質の悪いリサイクル製品などが多く、適切な価格をつけてもらえなかったのです。「リサイクルなんだから仕方ない」といった甘えもあったと思いますが、そういうことに甘んじていると、いつまでたっても産業としての地位が高まていきません。

リサイクル業界をリードしていくために、常に最先端の技術を導入しながら、もうこれ以上リサイクルのしようがないところまで挑戦しています。鉄スクラップも非鉄金属もすべて取り出し、あとは土しか残っていないという状態にどこまでも近づけていくことがこの業界の使命なのです。

間口は広く、出口は細かく

どんなものでも利用できるものはリサイクルして利用するという考えで、受け入れる間口を広げてきました。同時に、有価物を徹底的に細分化して取り出していくことも続けていきます。

現在、扱っているのは鉄スクラップと非鉄金属、プラスチック系ですが、一番の問題はプラスチックです。プラスチックはリサイクルすればするほど、塩化ビニールの混入率が高まり、最後は塩ビが含まれる廃棄物として処理せざるを得ないのです。プラスチックの衣料などへのリサイクルにも成功していますが、一度、衣料として使って廃棄されるとそれ以上の再資源化ができなかったのです。

そこで、私どもはドイツから最先端の装置を導入し、検知器で塩ビだけを取

り除き分類できるようにしました。これは画期的な技術です。生産工程は常に最先端の技術を求めてきますから、リサイクル事業の経営は知力、体力、行動力さらに決断力のいる大変な仕事です。

2004年に、石狩支店に大型のELV（廃自動車）解体工場を開設しました。マテックのリサイクル率は全国でトップクラスです。自動車リサイクル法で定められた「ASR（自動車シュレッターダスト）投入施設活用率」は、投入・回収されるエネルギーをASRの重量に換算し、回収を投入で除して算出します。現在、同活用率の認定基準は0.40ですが、マテックは0.5と大幅に上回っており、全国トップクラスです。

去年は、苫東にスクラップ工場を建て、道内のスクラップの半分以上を扱えるようになりましたが、今後とも道内にある工場の機能集約を進めていかなければなりません。また、今年は室蘭にストックヤードを確保しました。道外から自動車を持ってきたり、海外との輸出入も増えていますので、新しい設備投資を積極的に行っていかなければなりません。

豊かな自然を次世代に引き継いでいくために

北海道は自然の豊かさのおかげで農業や観光業が発展してきました。この豊かな自然を損ねることなく次の世代に引き継いでいくためには、各産業とさらに密接な連携を図り、リサイクル産業の地位を確固たるものとし、自然環境に負荷を与えない循環型社会を築いていかなければならないと考えています。

株式会社マテック

<http://www.matec-inc.co.jp>

